

A Survey on Children's Perception to TV and Divergent Thinking from TV

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47688

テレビの視聴能力と 拡散的思考に関する調査*

水越敏行・金沢市放送教育研究グループ**

I 研究の目的

(1)こどもはテレビ(とくに一般番組)をみて、制作者が伝えようとした意図を、どこまでよみとることができるのか。またその映像読解能力は、学年発達と相関がみられるかどうか。もしみられるとすれば、どの学年あたりにそうした映像読解能力の「ふし」がくるといえるだろうか。

(2)こどもはテレビでよみとったこと、わかったことをふまえて、他の社会事象や自然現象にまた他の問題場面に、連結し、発展し、拡散していくことができるのか、どうか。

わたしたちの今回の研究の目的は、この二つにわけてみることができる。

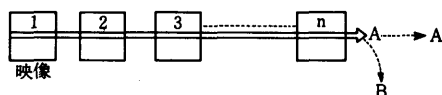
前者は、国語科にたとえていえば、主題のよみとりができるかどうか、そのよみとり能力が学年発達につれて向上しているかどうか、ということになるだろう。放送教育の全国大会が毎年もたれているが、第24回の札幌大会(1973)でねらった「放送学習」の考え方は、ここでいう(1)の範ちゅうにいれることができよう。

それに対して後者は、(1)の集中的思考とは逆に、拡散的思考をみようとするものである。テレビは(ラジオも含めて)「理解の増幅器」という機能と、「探究活動への増幅器」という機能とをあわせもっているというのが、わたしたちの基本的な仮説である。いいかえれば、(1)は主として、理解の増幅器として、また(2)は探究活動

や拡散思考の増幅器として、テレビが機能するかどうかを、こどもの実態調査を通じてたしかめてみようとしたのである。

しかもわたしたちは、(1)と(2)と同じようなウェイトをかけているのではなく、(2)の拡散的思考・探究活動への増幅器としての機能により研究の重点をおいている。もちろん、(1)はその前提である。たとえば、図-1で示したように、1 2 3……nと続いてくる映像で、1について、2について、というように、1コマごとに断片はよみとれても、1からnまでの全体を貫く主題、制作者の意図Aがよみとれなくては、この番組がわかったということにはならない。だからAがよみとれなくて、1, 2, 3……など個々の場面からの拡散がみられたとしても、それはわたしたちがねらう映像からの拡散ではない。そうではなくて、Aをよみとり、正しくとらえたうえでなおかつ、ある者はA'の方面へ、さらに別の者はBの方面へ、探索意欲をもち、探究をおこなっていく——こういう能力がこどもたちの中に育っているのかどうかを調べてみたいというのが、この研究のねらいなのである。

図-1 映像の読解とそこから拡散



昭和49年9月17日受理

** 押野 市男(金沢市立中村町小) 門田 芳子(金沢市立味噌蔵町小)
小竹 暉夫(金沢市立小立野小) 島崎 実(金沢市立此花町小校長)
中山 英子(金沢市立米丸小) 福原 俊夫(金沢市立小坂小)
前田 俊(金沢市立森本小教頭) 松田恵美子(金沢市立味噌蔵町小)
明星 哲久(金沢市立森山町小) 村中 一正(金沢市立三馬小)
吉田 貞介(石川県教育センター)

II 調査の方法

上にのべたねらいをもって、私たちは次のように調査の方法を組み立てた。

(1) 番組の選定

児童の発達段階・視聴能力・既習知識を前提としながら、まず番組表により『驚異の世界』（民放）と『新日本紀行』（NHK）を選び出した。6月中に放映されたこれらの番組を全部録画し、研究グループが視聴し吟味することによって、前者は「ニューギニア最後の裸族、パプア」を、後者は「羽田ぐらし・初夏」を調査番組として選定した。「最後の裸族、パプア」は10分間に編成しなおして、1年生から6年生までの共通視聴とし、「羽田ぐらし初夏」は5年生、6年生のみ視聴させた。

(2) 質問項目

質問のなげかけ方は、「番組視聴後、自分で調べてみたいと思うこと、疑問に思ったこと・興味・関心を持ったことを記述しなさい。」というように定めておき、学年によって表現の難易を変化させても良いことにする。1年生、2年生は絵で表現することも良しとする。

なお、「羽田ぐらし、初夏」では、「番組制作者の言いたかったことを記述しなさい」という質問を新たに用意した。

(3) 用紙記入方法

用紙はわらばん紙16分の1、1年生2年生は8分の1とする。記入は横書きとし、1枚の用紙には1項目だけ記入し、1人で何枚使用しても良いことにした。

(4) 記入時間

視聴後すぐ記入しはじめ、45分以内で完了する。しかし学年や個人差によって、多少の延長はみとめることにした。

(5) その他

カード記入の際には、学級担任教師がついた。しかし児童からの質問には原則としてこたえず、とくに特定の示唆を与えるような発言は、いっさいさけるよう配慮した。なお実施は1974年7月、実施した学校および児童数は、次のよ

うである。

表-1 「驚異の世界」被験者数

学 年	学 校 名・人数		計
1 年生	金沢市立森本小36名	味噌蔵町小36名	72名
2 年生	" 38	浅野町小 41	79
3 年生	" 35	小坂小 38	73
4 年生	" 43	味噌蔵町小42	85
5 年生	" 42	浅野町小 40	82
6 年生	" 42	小坂小 38	80
			471

表-2 「新日本紀行」被験者数

学 年	学 校 名・人 数		計
5 年生	金沢市立小立野小41名	森山町小41名	82名
6 年生	" 38	" 36	74
			156

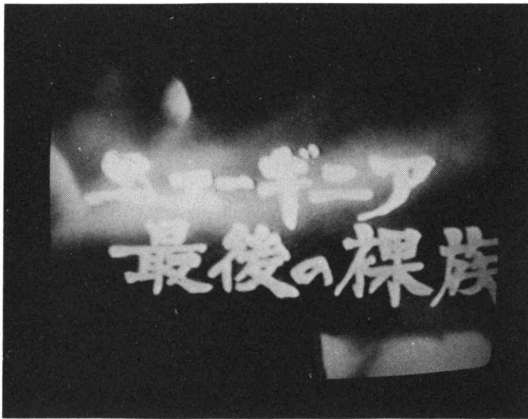
III データの分析と解釈

1 驚異の世界：「ニューギニア最後の裸族・パプア」

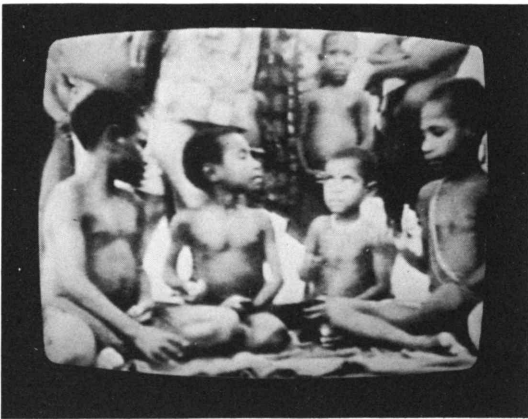
(1) 番組内容の概要



- 1 パプアの男が仲間を呼んでいる。
- 2 大自然と暮らすパプアの人びと
- 3 パプアとは「ちぢれ毛」という意味
裸で暮らす風習、石器時代が生き続けている
- 4 タイトル「ニューギニア最後の裸族」 (1分)
- 5 自然のようす
ジャングル、迷路のような川、
セビック川の上流にワグーがある (1分)



6 ワグーの村 (1分)
アメリカ人夫婦、マラリアから村人を救う



7 サゴを作りに森へ (1分)
カヌーで川を渡る、ジャングルの中を歩く



8 サゴヤシの木を切るのは男の仕事 (1分)
女は見物声援
9 切った木を砕くのは女の仕事 (0.5分)
男は見物



10 でんぶんをつくるのも女の仕事

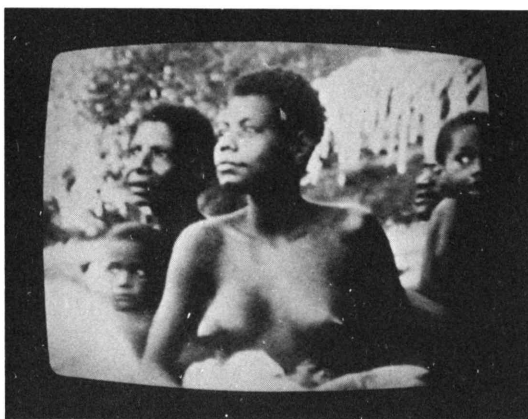
幹を細かく砕く、木のくずを水にさらす、歌声(1.5分)



11 男は川で子供を水浴びさす



13 1日の仕事が終わると、踊りが始まる (2分)
踊りだけが平和で幸せである。



(2) カード分類からわかる傾向

上記のような調査方法でカードを回収した結果、数千枚にもおよぶものがかえってきた。それをまず「わかったこと」と「調べてみたいこと」に分け、さらに各学年ごと仕分けしていった。この方法は集ってきたカードを同じ意味のものでくくっていき、そこでできたカード群をさらに同じ関係にあるものでまとめて大きなカード集団を作っていく、KJ法的手法の応用である。このようにしてこどもたちからでてきたカードを分類整理したが、ここでは今回の研究の目的からみて「調べてみたいこと」を中心にのべていくことにする。

「ニューギニア最後の裸族」の番組を見て、こどもたちがもっと深く調べてみたいと思った項目を縦軸に並べ、横軸に学年をとってそれぞれの項目のカード枚数を記入し、大きなカード群ごとの合計と学年でしめる割合を百分率でかきだしたものが表-3である。すなわちこどもたちがもっと調べてみたいと思ったことを1 地勢から 30 公害まで、30の項目に分類した。それらの項目にあてはまらないものや意味不明のものは、31, 32と別に取りだした。このように分類したカード群をまとめ、I 自然環境、II 人種特徴、III 衣食住、IV 日常生活、V こどもの生活、VI. 社会環境という六つの大きなカテゴリー(グループ)を作った。その六グループについて学年間の変容状態をグラフ化したものが図-2である。また六グループ間の割合をまとめたのが図-3である。これらのデータを眺めてみるといくつかの傾向が読みとれるので、これを列挙してみる。

- ①カード記入の枚数が1年(90枚)、2年(169枚)、3年(287枚)、4年(400枚)、5年(518枚)、6年(473枚)というふうに学年があがるにつれて多くなっている。このことは当然のことであるが、高学年ほど拡散の量が増え

表-3 「最後の裸族・パパア」をみて、もっとしらべてみたいこと

学 年 カード群		1 年		2 年		3 年		4 年		5 年		6 年		カード群合計	
		枚数	%	枚数	%	枚数	%	枚数	%	枚数	%	枚数	%	枚数	%
I. 自然環境	1. 地 勢			5		9		4		39					
	2. 気 候			1		1		2		10		19			
	3. 動 植 物			8		8		7		24		11			
	4. さ ご や し			4		8		19		21		7			
	5. 川			2		5		4		2		6			
	群 小 計	0	0	20	12	31	11	36	9	96	18	43	9	226	11.7
II. 人種特徴	6. 頭 髪 色			3		5		9		4		7			
	7. は だ の 色	10		8		17		6		7		6			
	群 小 計	10	11	11	7	22	8	15	4	11	2	13	3	82	4.2
III. 衣食住	8. 食 物	13		34		45		60		63		65			
	9. 衣 料	2		8		21		19		1		16			
	10. 住 居	1		11		20		17		2		20			
	群 小 計	16	18	53	31	86	30	96	24	66	13	101	21	418	21.6
IV. 日常生活	11. 風 俗 習 慣	16		32		55		110		73		41			
	12. 道 具			1		8		9		15		18			
	13. 文 字 言 語							3		3		2			
	14. 貨 幣							3		4		2			
	15. 交 通 通 信	10		7		13		13		6		12			
	16. 踊 舞	3		7		16		26		32		24			
	17. 病 気 治 療					11		15		9		33			
	18. 労 働	28		24		10		21		30		13			
	群 小 計	57	63	71	42	113	39	200	50	172	33	145	31	758	39.1
V. こどもの生活	19. こどもの暮らし	5				1		8		4		15			
	20. 学 習					2		14		12		16			
	群 小 計	5	6	0	0	3	1	22	6	16	3	31	7	77	4.0
VI. 社会環境	21. 人 口					12		2		22		13			
	22. 国 の 起 り							3		3		2			
	23. 戦 争							1		10		7			
	24. 文 化 族					2				21		35			
	25. 部 族					1		9		5		5			
	26. 他国との関係							3				5			
	27. 生 き が い									10		2			
	28. 原 始 生 活							6		3					
	29. 開 発 害											4			
	30. 公 害									2					
	群 小 計	0	0	0	0	15	5	21	5	76	15	73	15	185	9.6
	31. そ の 他			3		6		8		75		34			
	32. 不 明	2		11		11		2		6		33			
	群 小 計	2	2	14	8	17	6	10	2	81	16	67	14	191	9.8
学 年 合 計		90		169		287		400		518		473		1937	

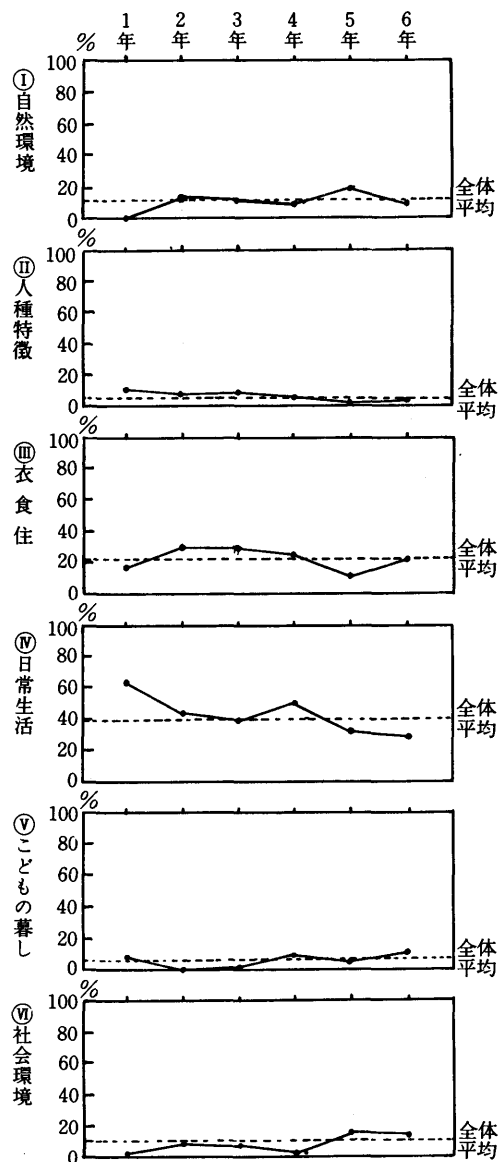
ていくことを意味している。

- ②この「ニューギニア最後の裸族」の映像が食物を得るための労働や、疲れをいやすための踊りに焦点をおいた写し方をしてあることも原因しているのだと思うが、その方面からの発展が非常に多い。このことは映像からの拡散の度合は、そこに写しだされている時間の長さで密接な関係があるようだ。
- ③全体の割合から見ると日常生活に関係することを記述したカードが断然多かった。小学生にとっては、自分の身近なものに関連づけての拡散が中心となっているといえる。しかもそれは低学年ほどはっきりとあらわれてきている。
- ④1から30までのカードのちらばり具合は低学年では少なく、学年があがるにつれて分散量が多くなってきている。特にⅥ 社会環境に関係するカードは中学年になってはじめてでてきている。そのカードが本当に多くなるのは5、6年生になってからである。
- ⑤要するに拡散の広がりや自分の周辺によく見られる風俗習慣や、日常生活をするための基本である衣食住や労働などから多くあらわれてくる。このことは拡散を起こすきっかけとなるものは、既有経験の量および質と深いつながりを持っていることを意味している。そのために低学年の間には拡散の分散度に大きな差があらわれてくるのだろう。
- ⑥10分間という短い映像を見せ、何も特別の指導をしなくても、現在の文化人類学などの分野で問題になっているところの言語、道具、社会組織、こどもの教育、文化や宗教⁽¹⁾などについて調べてみようとするこどもが相当数いる。このことは映像の構成次第で比較的年令の低い小学生にも、本質にせまるような発展的思考が可能であることを意味している。

以上カード群を検討することによって、上記のような諸傾向を洗いだすことができる。その⑤、⑥についてもう少し詳しいデータを分析

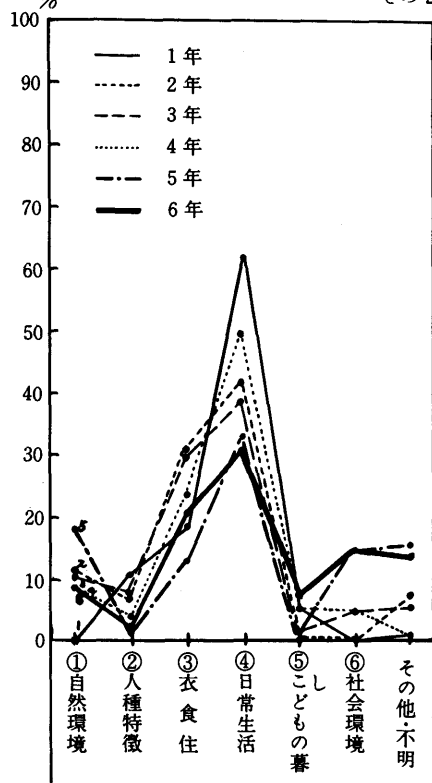
して、そのもつ意味をより深く考えてみる。

図-2 六つのカテゴリーにおける学年別の比率
—その1—



(3) 学年による拡散の変容状況

つぎに独創的な拡散（あまり誰でもが考えないようなユニークな拡散）について考えてみたい。傾向の②③⑤でのべたように、調べてみたい問題事項はいくつかの項目に多く集中している。

図-3 六つのカテゴリーにおける学年別の比率
—その2—

そこで集中度の高いⅢ 衣食住群,Ⅳ 日常生活群の11 風俗習慣,16 踊り,18 労働を除外することによって自由な拡散の割合を検討することにした。それをまとめたものが表-4である。学年ごとに上記のものをぬいたカード群の数とカード枚数をあげ、全体にしめる独創的な拡散のカードの割合をしめしてある。この表からもわかるように、カード群数、カード枚数ともに学年があがるにつれて増えている。群数が増加するということは一つの映像から多面的に広がることを意味している。それができだすのは中学年ぐらいからである。だからこの時期

において多面的な拡散思考を意識的に指導することが望ましいのではなかろうか。

一方カード枚数の学年における割合をみると、低学年は20%台、中学年は30%台、高学年は40%台をしめている。このことは低学年における拡散は映像の中心的課題の枠内での広がりだが、高学年では約半数のカードがその枠をやぶり、自由な発想をしていることを意味している。

(4) 文化人類学的視点からの検討

表-3の作成は、出てきたカードを基にしてKJ法的に分類したものであるが、つぎに視点をかえて人間の歴史と発展を見きわめる文化人類学的立場から眺めてみたい。その際いろんな基準や尺度があるだろうが、今回はブルーナが紹介したアメリカの新しいプロジェクトにみられる柱——人間を知るための五つの主題から切りこむことにした。すなわち道具づくり、言語、社会組織、こどもの教育、文化・宗教の五つである。ニューギニアの未開部族の映像を通してどれくらいこの方面の発展があるかをまとめたのが表-5である。ここで気づくことは3年と4年の間に断層のある社会組織やこどもの教育と、4年と5年の間に断層のある道具や文化宗教のグループがあることである。いずれもそこを境にした大きな開きがあり、こどもの関心の割合が違ってきているようだ。このような1例でもって深くはわからないから、今後の研究課題として残しておきたい。いずれにしても中心にあたる概念的なものをしっかりおさえた上での拡散的思考の指導が重要であり、こどもたちはそれに十分についていける力 (capability) やポテンシリティをもっていることを、この調査結果が示しているように思える。

表-4 独創的な拡散の学年別比率

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
拡 散 群 数	3	9	15	19	21	21
拡散カード枚数	25	39	103	137	236	227
学年における割合	28%	23%	36%	34%	46%	48%

表-5 文化人類学の鍵概念への拡散の学年別比率

カード群		学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	群合計
A.言	語	1. 文 字・言 語	0	0	0	3	3	2	8
B.道	具	2. 道 具	0	1	8	9	15	18	51
C.社 会 組 織	3. 労 働		28	24	10	21	30	13	
	4. 貨 幣					3	4	2	
	5. 交 通・通 信		10	7	13	13	6	12	
	6. 病 気・治 療				11	15	9	33	
	7. 部 族				1	9	5	5	
	8. 他国との関係					3		5	
	小 計		38	31	35	64	54	70	292
D.こどもの教育	9. こどもの暮らし		5		1	8	4	15	
	10. 学 習				2	14	12	16	
	小 計		5	0	3	22	16	31	77
E.文 化・宗 教	11. 文 化				2		21	35	
	12. 踊 り		3	7	16	26	32	24	
	13. 生 き が い						10	2	
	14. 国 の 起 り						3	2	
	小 計		3	7	18	26	66	63	183
カ ー ド の 学 年 合 計			46	39	64	124	154	184	611
学 年 全 体 で し め る 割 合			50%	23%	22%	31%	30%	39%	31.5%

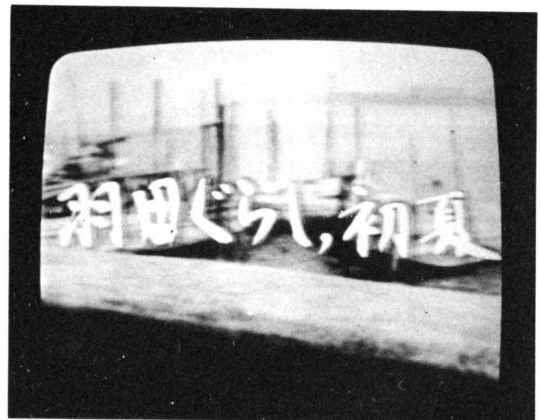
2 新日本紀行：「羽田ぐらし・初夏」

(1) 番組内容の概要

1 タイトル『新日本紀行』

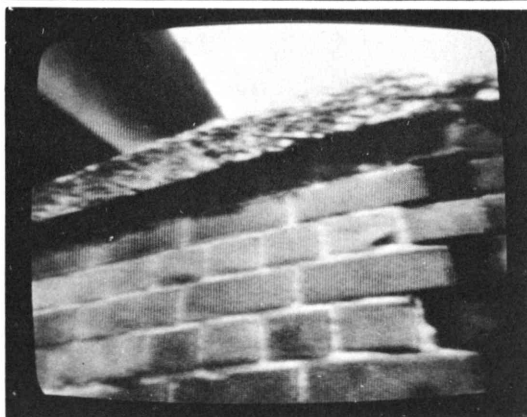


2 タイトル「羽田ぐらし、初夏」



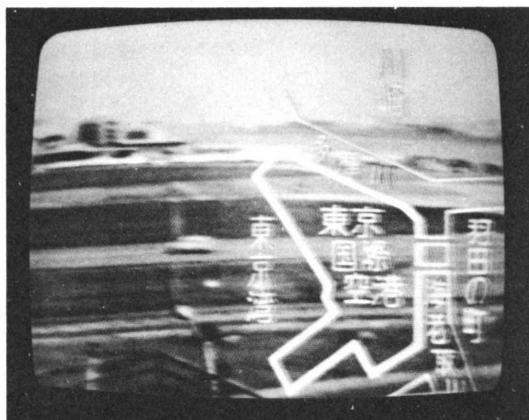
- 2 漁師の祭りが残っている
 水神祭のようす、船上ののりと
 羽田節、多摩川の堤防
 子供の遊び
 赤レンガの堤防だけが残っている

(4分)



3 古くからの人
船大工、古い「ろ」を大切に保存 (2分)

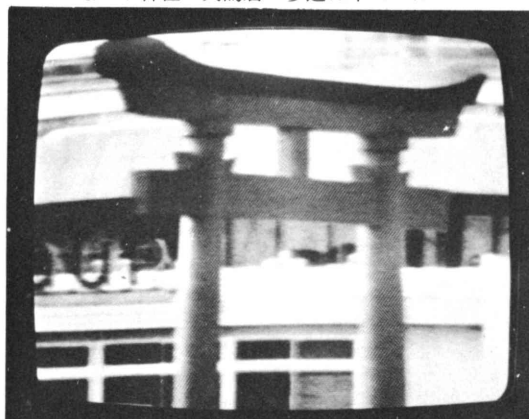
4 町が羽田空港で大きく変った
ジェット機と空港
弁天橋と今の町、海
人々は転業、海老取川が空港と町の境
海や川が汚れた



5 土地や家を奪われ転業した人
せんべい屋 昔の町のおもかげを語る
平和で楽しい暮らし (1分)



6 昔の町の名残り
あなごり神社の大鳥居 参道は車で一ぱい (3分)

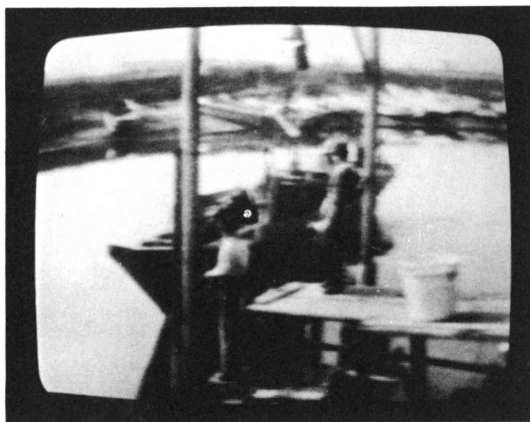


7 地藏堂と老人
老人の暮らし
地藏堂の思い出 弁天橋と高速道路 (4分)



8 今も漁をしている人

あなご漁 漁業保障はすんでもなお海を捨てきれ
ない人たち 海が汚れたんだん沖へ

9 若い人はサラリーマンに
朝の出勤

(2分)

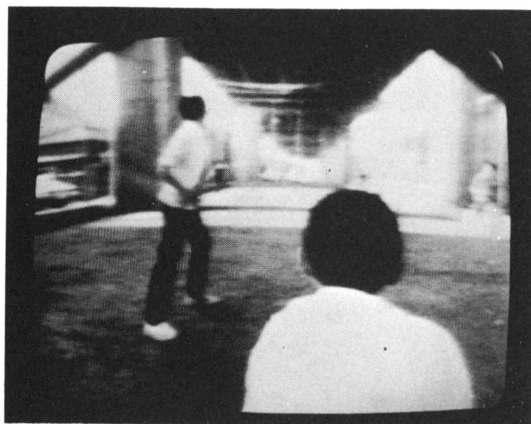
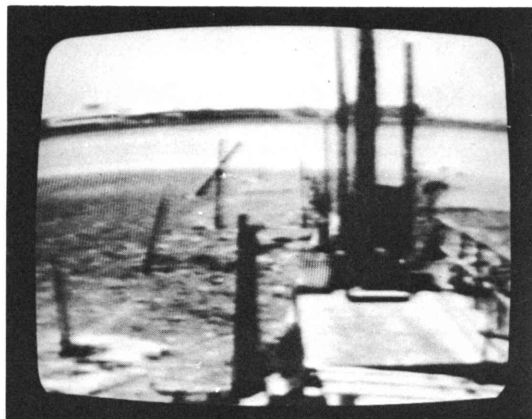


10 羽田の子守歌

(3.5分)

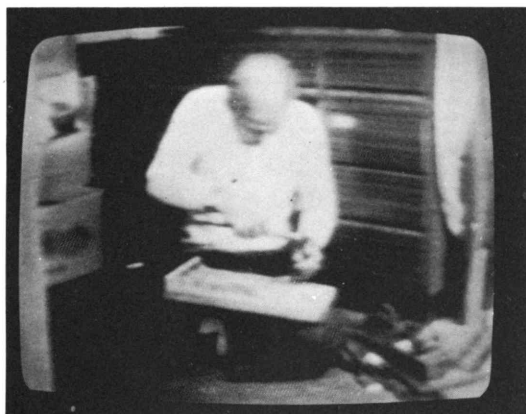
羽田の歴史を歌で表現

よごれた町 子供の遊び ジェット機の騒音

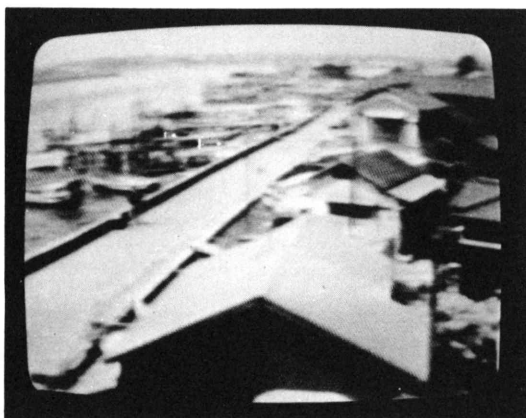
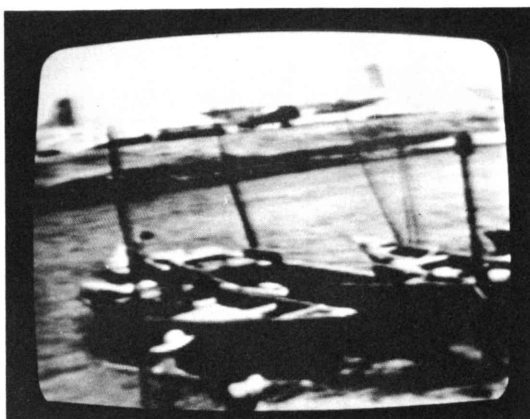


11 かつての船大工、いまは仏像ほりに

かつての漁師、いまは提防でひなたぼっこ



12 羽田空港の片隅に漁業の町羽田がひっそりと生きている。



(2) カード分類からわかる傾向

新日本紀行「羽田ぐらし・初夏」は、先へのべた驚異の世界「最後の裸族・パプア」の場合とちがって、5年生と6年生にのみ視聴させている。(この小論にまとめた後、さらに中学生で追調査をしてみる予定である)。また、質問もか

えている。「制作者のいいかったことはなにだろう」、「あなたがもっと調べてみたいと思ったことはなにか」という、二本だてになっている。このそれぞれについて、カード1枚に1項目の約束で記入させた。

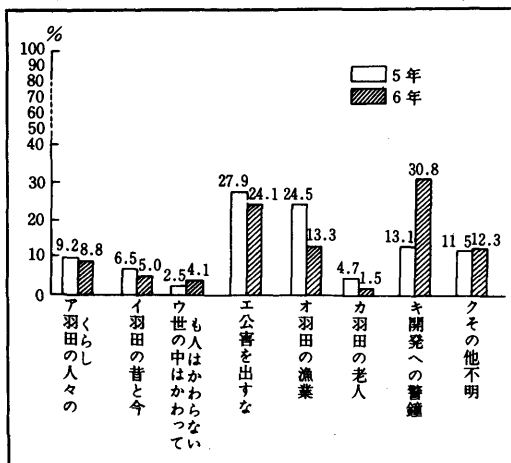
まず前者について分類整理してみたのが、表—6である。さらに、(ア)から(キ)までのカテゴリーの比率や、学年差をはっきりさすためにそれを図—4にまとめた。

表—6 新日本紀行「制作者のいいかったこと」分類表 (カッコ内は各学年のパーセント)

		5年	6年
ア. 羽田の人々のくらし	1 羽田の町のようすをわかってもらう	10	19
	2 羽田の人々のくらし	31	22
	計	41 (9.2)	41 (8.8)
イ. 羽田の昔と今		計 29 (6.5)	23 (5.0)
ウ. 世の中はかわっても人はかわらない	1 世の中はかわっても人はかわらない	0	4
	2 かわらぬものがあるんだ	0	4
	3 まつりは続いている	1	6
	4 レンガの提ぼうは残った	6	0
	5 古い物を大切に	4	0
	6 むかしの人の偉大さ	0	5
	計	11 (2.5)	19 (4.1)
エ. 羽田の漁業	1 羽田の漁業	22	9
	2 漁業の変化	0	7
	3 漁業する人がへった、年よりばかり	16	12
	4 羽田を去る若者	17	16
	5 海がよごれても漁業をする人がいる	26	9
	6 漁業をする人をふやしたりしてさかんにしたい	9	0
	7 伝統ある漁業	2	2
	8 漁業する人への気持ち	14	2
	9 海の仕事はひどいよ	3	5
	計	109(24.5)	62 (13.3)
オ. 羽田の老人	1 老人への気持ち	17	0
	2 羽田の老人	4	7
	計	21 (4.7)	7 (1.5)

カ. 公害を出すな	1 海をもとどおりにせよ	38	41
	2 自然を返せ	35	23
	3 川をきれいに、もとどおりに	3	2
	4 公害を出すな	23	18
	5 飛行機の騒音をなくせ	25	28
計		124(27.9)	112(24.1)
キ. 開発への警鐘	1 開発のもたらすよい所、悪い所	0	7
	2 羽田のかげの姿	0	6
	3 家や土地を奪われたこと	11	6
	4 空港ができたためにおこった悲しみ、いかり	23	63
	5 この羽田の苦しみを見てくれ	0	2
	6 羽田の人の気持ち	3	11
	7 空港をもとへもどそう	1	8
	8 羽田をつぶせ	0	2
	9 国のための仕事と人々のぎせい	0	1
	10 開発への警鐘	2	6
	11 科学への疑問	3	0
	12 国会は何をしている	2	3
	13 外人にまけるな	0	2
	14 人間と人間の関係	0	2
	15 今までの日本の反省	4	5
	16 これからの日本	0	6
	17 変化する日本	3	1
	18 自分のことだけでなく人のことも考えろ	0	4
	19 私たち子供への問題提起	2	4
	20 私たちへの希望	4	0
	21 これからの私たちの生き方	0	4
計		58(13.1)	143(30.8)
ク. その他、不明	1 その他	20	16
	2 不明	31	41
計		51(11.5)	57(12.3)
合計		444	464

図一 七つのカテゴリーとその学年別比率



まず「羽田ぐらし・初夏」という題名からして、(ア) および (イ) が主題としてうかがえるのは、大人として同じことであろう。この(ア)、(イ) では、5年生(15.7%)と6年生(13.8%)の差はみられない。

しかしこの表面的な主題からもう一步ふみこ

んで、その裏に制作者が訴えたかった「なにものか」があるのではないかと考えて、こどもたちはカードに、いろんなカテゴリーにはいることを記述している。

(エ) 羽田の漁業としたものは、6年生(13.3%)にくらべ、5年生(24.5%)は2倍ちかくも多い。ところがそれに対して、(キ) 開発への警鐘としたものは、5年生(13.1%)よりも、6年生(30.8%)が圧倒的に多い。この二点をもう少し詳しく分析して考察を加えてみよう。

「海がよごれても漁業をする人がいる」とか、「羽田の漁業」、「若者が去って老人だけの漁業」、「漁業する人への気持ち」など、いずれも5年生のカード数が多い。かれらは漁業を産業の中に位置づけ、ともすれば斜陽化という一般的傾向にある漁業を、いかに振興したらよいのか、若い人たちを漁船によびもどし、汚染をなくしていくにはどうすればよいのか……というような発想をしていることが、カードからよくとれる。これは5年生が現在社会科において、「日本の国土と産業」を学習していること、その單元では、産業をさかんにしていくにはという問題意識が育てられていること、などと関係があるのではなかろうか。

つぎに、開発への警鐘というカテゴリーにまとめたものに目を転じてみよう。6年生は、全体のカード数も多いが、多様性も目につく。カード数からいえば、両学年とも「空港ができたためにおこった悲しみ、いかり」が、群を抜いて多い。しかしその他に、「開発のもたらすよい所、悪い所」、「開発への警鐘」、「人間と人間の関係」、「変化する日本」、「これからの私たちの生き方」など、多様化していることと、より広い視野へと一般化していること、などが注目されるのである。

しかし見方をかえれば、(カ)公害を出すな、(キ)開発への警鐘という両者は、実質的には

同じカテゴリーになる。両者を合わせると、5年生の41%、6年生の55%を占めることになる。はたしてこれが制作者の意図、この番組の主題を本当にとらえているのであろうか。たしかに番組の最後では、

海が売られていくつ
あの日から父さん 人がかわり
朝から晩まで飲んだくれ
海は黒く 油まみれ
浜べも…… うめたてられ……

という子守唄が流れてはいた。しかしそれだけを訴えた番組ではない。

ほろびゆく古いもの、過去の保存……などを

表-7 「羽田ぐらし・初夏」からもっとしらべたいこと

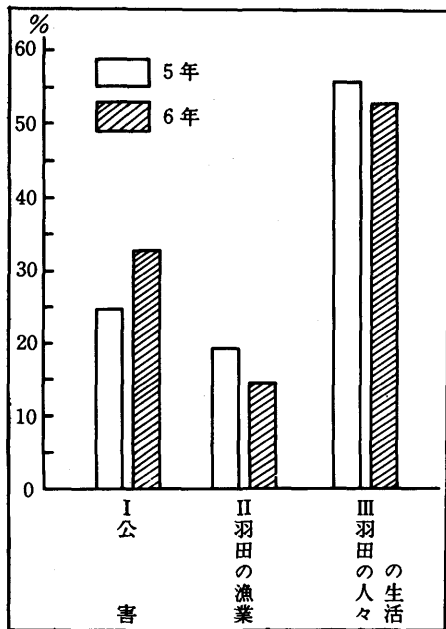
群	もっと調べてみたいこと	5 年			6 年		
		カード枚数	%	群合計	カード枚数	%	群合計
I 公 害	1. 公害の実態	116	21		51	14	
	2. 公害対策をどうたてるか	17	3	136	26	7	114
	3. 各地の公害について	3	1	(24.8%)	14	4	(32.9%)
	4. 羽田の実態を見て日本人はどうあるべきか	0	0		23	6	
II 羽 田 の 漁 業	5. なぜ漁業を続けるのか	14	3		28	3	
	6. あなごのとり方	25	5		3	1	
	7. 漁業の歴史	6	1		0	0	
	8. これからの漁業は	5	1	105	12	3	50
	9. 漁業の今のすがた	11	2	(19.1%)	2	1	(14.4%)
	10. 漁業のしくみ、収入、さかな所	17	3		1	1	
	11. 漁業がおとろえたわけ	22	4		4	1	
	12. 漁船の数、漁民の数	5	1		0	0	
III 羽 田 の 人 々 の 生 活	13. 羽田の人口	5	1		17	5	
	14. なぜ空港を羽田に作ったのか	21	4		6	1	
	15. 羽田の人々のぐらし、実態、気持ち	60	10		40	11	
	16. 羽田の歴史	21	4		11	3	
	17. 土地をとられた人の数、広さ、理由	20	4		17	5	
	18. 提防について	7	1		2	1	
	19. 子守唄について	7	1		4	1	
	20. 水神祭について	11	2		5	1	
	21. お地藏さんについて	0	0	306	8	2	182
	22. 交通について	19	3	(55.9%)	2	1	(52.6%)
	23. 私たちの町とくらべて	4	1		11	3	
	24. 羽田の気候	2	0		0	0	
	25. 羽田の未来	2	0		7	2	
	26. 羽田空港の広さ、収容数	9	2		2	1	
	27. 羽田にのこる老人の生活、気持ち	44	8		14	4	
	28. 羽田を去る若者の気持ち、わけ	37	7		19	5	
	29. 空港側の人々の気持ち	9	2		5	1	
	30. 羽田の子供の生活と勉強	28	5		12	3	
カ ー ド 枚 数 合 計		547			346		

象徴さすものとして、羽田の初夏をたんたんとして描いた面も、あるのではないか。(ウ)世の中はかわっても人はかわらない——5年生(2.5%)6年(4.1%),(オ)羽田の老人——5年(4.7%),6年(1.5%)などが、もっとクローズ・アップされてしかるべきではないのか。公害、開発への警鐘といった一つの認知のパターンが、かれらの中に育っており、この種の社会番組をすべてそういうパターンにあわせて解釈しようとする思考様式が、ここでその一端をみせているのでなかろうか。

以上のことは、二番目の質問——番組からの拡散についてもまた、ほぼそのままあてはまるように思う。

カテゴリは、大きく三つにわかれて、I公害、II羽田の漁業、III羽田の人びとの生活となる。(図-5)

図-5 三つのカテゴリと学年別比率



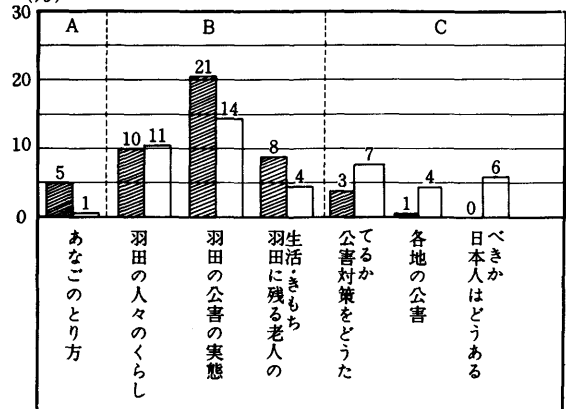
その中味をさらにくわしく分析してみたのが、表-7である。

これをみてまず感ずることは、5年生と6年生の学年差がほとんどみられないということである。しかし表-7の中味をもう少し吟味していくと、両学年の傾向がいくらかははっきり出てくる。

5年生は、先にものべたように産業の学習の一部として、農業を取り扱っているため、拡散についても、漁業につなげてくるケースが多い。また公害問題についても、4年生で公害の種類

や場所についての学習をへているのこともあって、公害問題へのつながりが多く出てきている。しかし「公害の実態はどうか」「羽田の漁民の収入」というように、番組内容との直結型の拡散が多い。あるいはまた、「あなごのとり方は」、「水神祭のようす」「土地をとられた人の数、広さ、理由」など、番組内容からの末梢的拡散が、5年生により多い。その反面において、「公害対策をどうたてるかとか」「このような傾向は全国的なものか」というように、番組内容から一般化した拡散になると、非常に少なくなり、6年生との差がはっきりあらわれてくる。図-6をみられたい。

図-6 三つの拡散のタイプと学年別比率



A: 末梢型の拡散, B: 直結型の拡散, C: 一般化型の拡散

それとともに、図-6をみてわかることは、両学年ともBの直結型拡散が非常に多いことである。それは拡散ということばには本来あたらないのであって、「関連づけ」とか「深化」というべきかもしれない。それに対して、Cの一般化していくような問題追究は、5年生はもちろん、6年生においても、10パーセントにみたない。この点は大きな問題であろう。後でもう一度ふりかえってみよう。

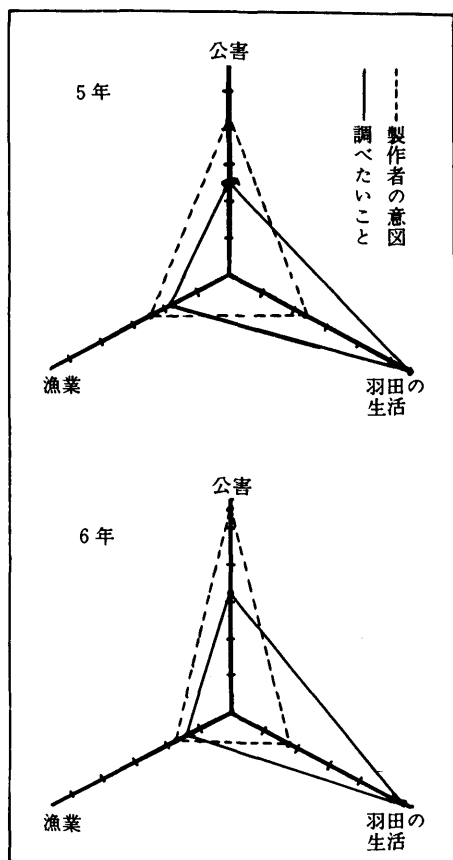
・「制作者のいいかったこと」と「もっと調べてみたいことのギャップ」

新日本紀行における上記二種の調査を対比してみると種々のことがわかる。たとえば映像の理解のわりには発展的拡散能力は弱い。このことは従来からの放送使用の方法を今一度検討してみる必要があると思われる。

また、「いいたいこと」と「調べてみたいこと」が必ずしも一致していないことも問題点の一つと思われる。それは次の図-7を見るとよくわかる。5年生6年生とも番組のいいたいことは

「公害問題」であるとしながらも、自分の調べたいことは「羽田の生活」の方が多くなる。これは5年生、6年生とも、ほぼ同じ傾向を示している。

図一 7 制作者の意図ともつと調べてみたいこととの関係



IV まとめと考察

ごくささやかな調査と、きわめて初歩的なデータ処理しかできなかったわけだが、それでもこの調査結果から、いくつかのことが指摘できると思う。すでに本文の中で、そのほとんどについて言及してきているので、ここでは重複をできるだけ避ける形で、まとめをつけてみる。

(1) カード法の効用

番組をみせて、視聴ノートをとらすとか、感想文をかかすとかいう事後処理が、よくおこなわれている。たしかにそうした処置は、有効かつ有意味であることを、わたしたちも実践経験を通して知っている。しかしながら、こうした視聴ノートや感想文は、低学年児や、書くこと

に抵抗のあるこどもには、必ずしも有効な方法といえない。また、高学年児や、かなり文章表現力をもつこどもの場合でも、文章にかくというフィルターをろ過するために、番組から感受したことがそのまま表現されず、一種の屈折現象がおこりがちである。まして今回のように、映像からの拡散をみようとする場合には、文章化を要求することが、かえってマイナスになるのではない。もっと自分のアイデアや感じたことを、断片的なままでよいから、自由に、多面的に表現させる手法をとった方がよいのではない。こうした考え方にもとづいて、カード1枚に1項目を自由記述させ、そのカードをあつめてグルーピングし、それらの群（カテゴリー）を関係づけ、解釈していくというKJ法的な手法を採用してみたのである。結果的にみて、この手法はやはり有効であったと思う。視聴ノートや感想文では、600人をこえる被験者からともこれだけのデータはとれなかったろう。

(2) 多面的な拡散と認知（思考）の枠組

番組からの多面的な拡散という点では、「羽田ぐらし・初夏」（NHK『新日本紀行』より）よりも、「ニューギニア最後の裸族・バプア」（民放『驚異の世界』より）の方が、よりすぐれていた。すなわち、「羽田ぐらし・初夏」（30分マルゴト視聴）の場合は、番組内容との直結型拡散が多い。また一般化型の拡散がいくらかみられる6年生でも、結局は、公害対策はとか、騒音・開発などその他の公害とのつながりとかいうように、同じパターン同一のカテゴリー内での屈折深化になっているにすぎない。ところが「ニューギニア最後の裸族・バプア」の場合は、わずか10分の部分視聴にもかかわらず、いわゆる多面的な拡散が出てきている。道具づくり、言語、社会的分業、社会組織、文化や宗教といった文化人類学の鍵概念に相当するようなものが、「もっとしらべたい」として、こどもの中から出てきている。

このことの理由づけは、人によってかなりわかれるところであろう。わたしたちの研究同人の間でも、必ずしも一点に収められた理由づけはえられなかった。しかし一つだけ共通していたことは、「羽田ぐらし・初夏」の方が、学校での学習——産業学習や公害学習——との連結をよりつよくもっていること、したがってかれらは、先入観とでもいえるような思考の枠組をもって、この番組を視聴しているということであった。いいかえれば、こういう既存のパターンとの短絡的な結びつけが強いために、本来もっと出てきそうな拡散——たとえば老人福祉問題とか、伝統や文化財の保存など——が、その影をひそめたのではなかろうか。

それに対して、「ニューギニア最後の裸族・バ

ブア」の場合は、先入観とか既有知識・経験といったものがほとんどない。そのために、低学年児では末梢的な拡散や、日常生活に直結させたものが多くみられたけれど、学年が進むにつれて、つまり番組内容のよみとりが深く正しくできるようになるにつれて、独創的で多面的な拡散が可能になってきた。映像が本来そなえもっている拡散への増幅器としての機能が生かされたし、こどもたちももっている多面的拡散思考のポテンシアリティが、素直に表面化しえた、とみることもできるのではないか。

(3) 視聴指導のあり方について

今回のわたしたちの調査は、教師の誘導・指示というような独立変数をなくして、テレビ番組だけに限定するよう心がけた。しかし調査ということをはなれていえば、こどもたちの番組視聴能力、情報処理能力といったものを、まさに教育の働きかけの対象として位置づける必要性を痛感しているからこそ、こうした研究サークルにつどい寄ったのである。

「羽田ぐらし・初夏」についていえば、こどもたちは制作者のつたえたいこと、番組の主題は、ほぼ正確によみとっている。いささか公害問題に視点が集中したきらいはなくてもないが、「羽田の陰」などという主題のつけ方は、とても小学生とは思えぬほど見事に制作意図を射あてている。このような映像読解能力は、国語科や社会科の学習経験が、直接・間接にきいてきてもいるのだろう。近頃よくいわれている「放送学習」も、またそれと対照的にみられている「放送利用学習」も、ともに、こうした意味でのよみとり能力の育成をめざしてきたし、今もめざしていることは、間違いない。

それに対して、映像からの拡散や発展という点については、これまでほとんど指導の手が加えられてこなかったのではないだろうか。いや、手が加えられなかったどころか、学校教育における集中的思考の重視が、そうした多面的・創造的な拡散や発展の芽をつみとるような結果をもたらしていたのではなかろうか。この拡散や発展をもたらすためには、映像のよみとりをさせる場合とはまたちがったプログラムによって、もっと異質な指導が加えられるべきであろう。それがどんなものか、まだ具体的な形で出すまでにはいたっていないが、発見学習や探究学習が今までのものよりも、もっと制御・誘導の少ない形でなされるというイメージを、現在のところはもっている。

(4) 学校放送番組について

今回のわたしたちの調査が、2本とも学校放

送番組でない一般番組をつかっていること、これはある意味では、現在の学校放送番組のあり方についてのわたしたちの疑問のあらわれともみることができる。というのは、どの校種、どの教科の番組内容でも、カリキュラム・エンリッチメントの立場がはっきり出ている。つまりテレビを理解の増幅器として機能させている傾向がつよい。坂元 昂氏の表現をかりれば、テレビのもつ二つの機能のうち、「つたえる」という機能はフルに生かされているが、「うごかす」という機能は、ボーナスとしては算定されていても、基本給にはいれられてない。

学校放送番組について、少なくとも次の三つのタイプがあると思う。訓練の増幅器、理解の増幅器、そして拡散・発展の増幅器がそれである。この三つを下手に折衷することなく、それぞれ意図的に強調した番組を制作していくことが、長い目でみて、放送教育の普及と前進にもつながるのではなかろうか。(水越敏行：「放送学習における教師の役割」放送教育誌、1974.9にくわしい)。

最後になったが、今回の調査に全面的なご協力をいただいた金沢市立森本小、味噌蔵町小、浅野町小、小坂小、小立野小、および番組の録画や写真などでいろいろとお骨折りをいただいたNHK本部事業部の伊藤三千男デスク、新日本紀行制作班、及び下坂淑男ディレクター、北陸放送(MRO)の北野登喜男チーフディレクターに、心から謝意をささげたい。

(1) J. S. Bruner: *Toward a Theory of Instruction*, (Harvard Univ. Press, 1966), Ch. 4, Man: A Course of Study.